



日本絵類考

二

10
75
11



日本絵類考卷二

目錄

佛画

松天井絵

扉絵

泥絵

蒔絵

團扇絵

絵馬

水手画

障子絵

壁絵

屏風絵

表紙絵

木葺画

扇絵

掛物絵

木絵



胡粉仕

燒画

位日記

漆画

位櫃

佛画

佛画ハ佛像と画きたるものなりトハ以テ繪画江  
 草考ハ欽明天皇以後ハ佛像及諸莊嚴等と云  
 々其草と精々ト丹精と施と頗緻悉なりト叙来  
 佛画ハ香汁ととて画き又本草ととて画くと法  
 々古昔佛画と画く者ハ画佛師と稱シ朝廷ハ  
 仕ハ僧個々ナリ他ノ住師ト異ナリ之ヲ可達書  
 小摩訶吠室囉未那野提婆唱囉周陀羅尼儀軌一  
 在曰先須画像其画像時彩色中不得著皮膠唯用  
 香汁白月一日請匠清潔深浴持齋受八戒出入時

須三具衣若上廁即香湯沐浴亦莫論手功多也便  
取<sub>二</sub>白鬘若無<sub>一</sub>白鬘好細絹亦得一丈五尺<sub>三</sub>天玉  
身著<sub>二</sub>七宝金剛莊嚴甲冑<sub>一</sub>其左手執<sub>三</sub>三叉戟<sub>二</sub>右手托  
腰<sub>一本云云</sub>左其脚下踏<sub>三</sub>三夜叉鬼<sub>二</sub>中央名<sub>一</sub>把天亦名  
歡喜天左邊名<sub>二</sub>尼藍婆<sub>一</sub>右邊名<sub>二</sub>毘藍婆<sub>一</sub>其天王面作  
可畏猛怒眼滿開 神佛靈像圖彙の序二古德  
云<sub>二</sub>蓮佛殺<sub>一</sub>佛蓮祖殺<sub>二</sub>祖其機<sub>一</sub>一用一棒一喝以摧疑  
團破執取名相者或如丹庭和尚燒却木佛像了盡  
然凡夫庸俗豈能徹<sub>二</sub>向上去<sub>一</sub>旨耶故大覺世尊以大  
慈悲心方便利導使<sub>二</sub>彼凡庸<sub>一</sub>赴漸修也一日有某國

重諸佛菩薩乃至諸天諸神之靈像來請俾予為序  
壽<sub>二</sub>干梓<sub>一</sub>矣予斂衽危坐<sub>二</sub>從頭拜覽<sub>一</sub>之  
故<sub>二</sub>我國最古<sub>一</sub>佐佐木<sub>二</sub>佐重<sub>一</sub>ハ<sub>二</sub>佛<sub>一</sub>重<sub>二</sub>なる<sub>一</sub>巨勢定  
摩<sub>二</sub>等<sub>一</sub>の<sub>二</sub>重<sub>一</sub>ハ<sub>二</sub>その<sub>一</sub>今猶古寺は<sub>二</sub>宝物<sub>一</sub>となりてあ  
る<sub>二</sub>政州人<sub>一</sub>評<sub>二</sub>ハ<sub>一</sub>曰<sub>二</sub>日本<sub>一</sub>古<sub>二</sub>代<sub>一</sub>の<sub>二</sub>佛<sub>一</sub>重<sub>二</sub>ハ<sub>一</sub>伊<sub>二</sub>古<sub>一</sub>利  
の<sub>二</sub>古<sub>一</sub>代<sub>二</sub>の<sub>一</sub>佐<sub>二</sub>重<sub>一</sub>ト<sub>二</sub>異<sub>一</sub>なる<sub>二</sub>こと<sub>一</sub>於<sub>二</sub>此<sub>一</sub>ト<sub>二</sub>英<sub>一</sub>人<sub>二</sub>巴<sub>一</sub>德<sub>二</sub>氏<sub>一</sub>  
ハ<sub>二</sub>日<sub>一</sub>本<sub>二</sub>美<sub>一</sub>術<sub>二</sub>沿<sub>一</sub>華<sub>二</sub>誌<sub>一</sub>ハ<sub>二</sub>指<sub>一</sub>佛<sub>二</sub>重<sub>一</sub>の<sub>二</sub>術<sub>一</sub>ハ<sub>二</sub>初<sub>一</sub>メ<sub>二</sub>支<sub>一</sub>那<sub>二</sub>及<sub>一</sub>  
朝<sub>二</sub>鮮<sub>一</sub>ト<sub>二</sub>日<sub>一</sub>本<sub>二</sub>小<sub>一</sub>精<sub>二</sub>入<sub>一</sub>々<sub>二</sub>ル<sub>一</sub>ナ<sub>二</sub>リ<sub>一</sub>ト<sub>二</sub>評<sub>一</sub>之<sub>二</sub>其<sub>一</sub>原<sub>二</sub>ハ<sub>一</sub>  
印<sub>二</sub>度<sub>一</sub>ハ<sub>二</sub>初<sub>一</sub>メ<sub>二</sub>印<sub>一</sub>度<sub>二</sub>ト<sub>一</sub>朝<sub>二</sub>鮮<sub>一</sub>ト<sub>二</sub>入<sub>一</sub>々<sub>二</sub>又<sub>一</sub>支<sub>二</sub>那<sub>一</sub>朝  
鮮<sub>二</sub>ト<sub>一</sub>還<sub>二</sub>ハ<sub>一</sub>日<sub>二</sub>本<sub>一</sub>ト<sub>二</sub>入<sub>一</sub>々<sub>二</sub>ナ<sub>一</sub>リ<sub>二</sub>今<sub>一</sub>印<sub>二</sub>度<sub>一</sub>の<sub>二</sub>工<sub>一</sub>藝

ハ其係と何處小奈と一やと訊るも、小大小希  
瓶の工藝と學びたる可あり、如し是ふも、  
之と云ふハ日本の佐重及彫刻のものと希臘の佐  
重及彫刻の居小此と云ふれたるものといひて大  
過なり、一減小日本古代の如し、重家の他  
と古代伊古利の重家の他とを對比するも其の  
時ひたる所ハ何れも希臘の工藝の如し、こと柄  
為し、一減なり、佐重沿革考、延喜天曆の同  
小於し、書重の風一書と一の之を、ハ佛像の容  
海と、一書と一佛像と造る可ハ、重く道ふ、

ことなどハ、時て、ハ、佛像の容、漸愛と一  
ハ、延喜天曆の法、ハ、佛師定朝の出て、  
標と、脱し、新様の備り、ハ、佛師定朝の出て、  
ハ、其、ハ、長秋記、長養三年四月十日  
の條、ハ、佛、充化佛、可被用、何哉、飛天、後、唐、州、定  
朝、佛、多、飛、天、充、也、可、然、後、仰、云、定、朝、以、後、之、代、去、佛  
者、皆、作、飛、天、充、今、度、如、此、後、と、見、ハ、又、同、書、曰、年、六  
月、十、日、未、刻、招、具、佛、師、院、朝、向、西、院、故、邦、恒、親、王、室  
此、所、佛、師、定、朝、有、造、佛、天、下、以、是、為、佛、本、樣、仍、為、一  
礼、所、參、詣、也、と、見、之、又、玉、海、安、元、二、年、九、月、廿、二、日

の條ふ 今日院慶寺入奉押薄於佛又申定朝故其  
等なり是して定朝々新様の佛像の式と定めし  
し其子孫及門弟子のしりて天下一般佛師  
の法式とししは是の文とて知しし定  
朝の後一條天皇の在宇の盛なりし人して其の後  
一條天皇の在宇の支那の宋の真宗の時之國を  
棄小定朝の容様と改めしは隋唐の旧式と捨て  
五代しし初まりしもの同の新式と極し成し  
佛像の沿革の如しは佛師連く并の像の沿革  
も亦此の如し

又按に近世佛畫の右手ハ逸見一信神田宗貞の  
徒也其一信ハ將所赤川彰信の門人なりて甚  
上寺より十六羅漢の幅下信成田村不動堂五  
百羅漢の彫刻下画等ハ其の如し并て又久  
二年没し神田宗貞ハ赤叡法親王ハ社へ佛畫  
師なりて世々根岸ハ恒ち佛畫の畫きて書  
他の花弁鳥獸山水人物等と畫きたりて其書  
并文行堂書教百葉の佛畫と買ひ集めて今ハ不  
きしこと宗貞の家より出たりその如し古  
佛畫の字なりき今何くもあつたとおし赤叡



按小隙みと唐紙のつとこと詳々なりは疑遊笑  
買小玉勝同小台祀別紙小痕殿藤中調度未立上  
達部聖跡子可後信今日猶為唐紙不可然し何  
この唐紙に唐國の紙とも、伎あり、唐紙のつと  
とよよのり、こまの今世も念跡のつと  
紙あり、一種の紙あり、とよよのり、こまと唐紙  
とよよのり、ひまぢぢの紋のありてよの幸紙紙  
とよよのり、こまの今世も念跡のつとよのたよ  
果ぢぢのつとよの唐紙のつとよの幸紙のつとよ  
のつとよの跡のつとよのいぢぢのひまぢぢの跡の

のこまのつとよの跡のつとよのいぢぢのひまぢぢの跡の



松天井経

社寺は松天井の龍の如く天女なりと云くは蓋し  
神佛の威嚴と添へたる者なりと云くは古昔明兆の  
福寺の殿前より其の法堂の天井に描能と云  
く大才十餘丈腫光鱗色皆生る如く一取更龍  
風雨の疾に殿堂を壁き而て天に拂ふと云  
其の後狩所永徳寺長秀公の奉と奉し更龍の  
再修に著し半連の如く病ふ如くもて狩  
所山樂代より再修と云く明兆の龍の殿に飛ひ  
去りて痕跡なき如く世に於て更に取二女余



この本製といふ但入の石と云ふ一即井の字の  
文なりしと云ふ

壁画

壁画ハ一、此件画と云壁の白紙を施す是  
またそののちれい云古来是の室内に一畫  
画にして其画ハ大極障子小日一後世も  
聖母とて花弁又後形等画たりと此件と  
を来壁紙と唱へ花鳥等と出でて恰金唐草の  
如くなりたりと製一海外小輸出と云格と  
壁画の最古なりハ法隆寺金堂の壁画也小杉  
邸氏の説ハ大和國平群郡小存所の法隆寺ハ  
人古く知り古佛刹にして即今月はあり



土戸西服壁新迦國土如法經書自餘壁菩薩立  
像後上柱貫上深山中羅漢等位所書皆坐像一間  
左右各一躰也とありて在本寺金堂佛像記と云も  
のうへに尚寺ハ吾朝最初正額又最初建立佛因也  
然則金堂四方壁面柔師洋土國徒云と鞍作部と  
云く百濟國より佛工渡吾朝佛作又奉鑄又國徒  
等才藝拔群なりとも記し又本寺五師源春房重  
懐の作とあり白拍子記も壁面柔師洋土と國  
徒せしハ鳥佛師なりと傳へしことハ應安二年  
の作と上の金堂佛像記ハ寛正五年の注進なり

の世頃か鳥佛工の徒りきしと主張せしと  
ありて按ふ今もその國徒ハ右子傳記記小い  
つゝ如きふかりしと記ハ鞍作部鳥ハ推  
古帝時代小名言き佛工なりと司馬達等孫文  
須奈の子なり故に最初草創の時の壁面ハ必  
鳥の更きしものなりと云ふ其旧建築の金  
堂ハやく天智帝の九年の火災小罷りて焼亡  
し和銅再營の如きも其國徒ハ旧式よりして尚  
時の石匠より更きし事なりと云ふ鞍作部の石匠  
と傳へて鳥よりけて之を鞍作部と云ふものなり

――― 折は壁画としてその、高小等より其小感と  
り、大作として其梵相の端巖及回教區域の布  
置より其の意匠の言尚筆力の雄廉設色のたゞ  
なからざる親人として感懐と惹き渴仰の念と  
おこしむ。妙技嘆羨餘りあること如くなり  
右名の鳥、意匠と整ひて其具く小走りたる名  
工の画き、なせる事、い明かす凡上古の佛画々  
手關係と印度の祭、三韓の入り、まゝ吾々の  
傳としてそのゆゑに鳥佛師の筆法即其本色と  
親つたり一大宝鑑として、但上文より諸記

と引ていへば、如く物理言語の度こゝも其毀  
れと補ひ、入筆として續け、終るに軍々々  
と注きて其原物と見別く、その本意もも  
て未だ能親とさる人々、即今帝國博物館の列  
品中よ、先年桜井香雪、丹波とそして、出  
つゝ大幅数個あり、ことと見て其大く、ハ奈  
て可なり、又圓式巨細の設色、ふらふら、余々  
と、おとされ、ハことと辨つ、事を得て上文を  
傳記、又金堂佛像記、白拍子、歌の類、小姑、く従ふ  
つゝ、その、蓋し儀軌、その、その、ハ法大徳者

其所信と自己の所信と信じて重子よらんと余  
して一定の法則ありと聞かれいなり於其の  
業道も物よりくきりまやりき事なり

扉重

扉重ハ神社佛閣の扉の重ハ扉の重ハ古くして  
也ハ傳いしハ戒壇院の扉の重なりと云天年  
勝宝七年ニ取真人元開ハ筆を以て所作りと云且  
今ハ焼去して新跡と云ハ高山寺ハ此の墓本  
あり古土作某の撰と一所よりハ瑞雲氏の説ハ  
在傳異術古土作の撰本ありて高山寺ハありて  
其のなりハ其の撰本ありて由ハば  
其撰本高き人其撰本と浮る云々夫無天年村  
代の信と云ハハ此の撰本と云ハハ雅韻抽と

へきまの所を其用筆法の如きハ毫も規矩籠垂  
は力と能く其書法ハ所習無腕直筆ありて運用  
自在故能く動の回小於て自法度の正格と異ハ  
さるハ亦亦二王以下の州書ハ類似も其の動  
利もよくその飾裏の金針の如く輕纖なりこと  
ハ遺絲の聯綿として能くさるる如く適堅なり  
そのハ春筍の寒香と描く筆を破るる如く直  
硬なりそのハ長松の虚享ハ筆振して風と常ハ  
るる如く是蓋ハ六朝の後の書法と相去ること  
甚かりしとして是も作者たるものハ予志と用筆

小注きたりの送凡ハありし人の有さるること  
ハ後人の所習法脈と以て世と暮ハ其味と得ん  
と欲もその其の一斑と得る能ハさるハ亦異ハ  
小号ハ其の所習として寧ろことと金筆と其の小  
らん中折東洋信鳥の妙ハ用筆の如何ハ詳志と  
せんハ其の馬を丹青塗抹の巧と以て能くその  
筆見るとそのとりつと得らん中浪香遠の名画能ハ  
白く支物と象ハ其の必形似ハあり形似ハ須く  
其の骨氣と全ハ其の骨氣形似ハ皆立念ハ本  
つり而して用筆ハ其の故ハ画と巧ハ其の



いふ書と云くもと古の画と暮をんし  
のい必世の語と體しるし

扇風経

扇風ハ天武天皇の兼鳥元両年春新羅國より始  
てこれと教ふに扇風ハ魚根ありしと云ふ後  
まゝ禪をとり孝徳天皇の天平勝宝年中法華藏  
器子抄の在りし東大寺佛大正集諸の母其の同  
十八所條の古右佳木の路次と鴨毛の扇風と  
て塞きたりしを其の後全扇の更ハ書ふと由  
と云扇風のなかりき魚扇風の竹根と云  
り禪かりしれし最古の松抄よりあり地獄  
伝の在扇風及び唐經の扇風小右記より傳経

の屏丸新勅撰集あり泥佐の屏風石清水東寺  
臨時祭屏風等あり

按し屏風一十紙屏又曲屏圓屏もつ小二枚  
あり六曲あり九曲あり狩野家屏風の重法小  
曰く屏風の魚は大極四条とて要し山水人  
物花鳥皆日一山川樹竹の大小の國様小應と所  
留古枚の圓屏二枚の圓屏一大概大魚  
と魚くへ

泥佐

泥佐の訓としてテ工全泥又の銀泥とて馬と  
たると以て妹遊藝覧に泥佐の全泥と刷りて  
くまると其の上小章花蝶鳥とて全泥とてか  
くとり銀泥と用也古画侍者小新勅撰  
泥佐屏風石清水臨時祭権中納言  
宇定家長小  
とて竹の大客人のりさささるる工  
藝志料に延喜五年醍醐天皇制して須我流刀一  
柄と送るにて伊勢の大神宮の神室とて靴の  
長とて工全泥とて花巻とて天皇又制して

痛去の時用り、新の佛位と成る妻一と納り、  
、新の細管に玉漆を以て之を塗り、金銀の泥位  
と化し、む固て玉漆金銀泥位の細管とす、  
未金銀泥を以て器物に画く、こゝろ  
按ふ細紙の位表又、色紙を以て泥位と位と  
この方、左の表代の字、即其の一なり

表紙位

葉花物語に、天壽元年九月廿三日とあり、  
也信ひて器、中門後、とあり、  
徒、信、う、せ、り、と、表紙の、  
心、と、新、皆、の、也、信、と、大、道、と、  
し、さ、り、の、心、の、入、り、と、  
ん、わ、り、と、  
按ふ表紙、信、と、  
は、魚、の、紋、標、と、彫、刻、と、  
其、の、上、に、袋、と、  
彩、と、  
画、と、

さあ〜〜〜ちりたるも今親よりり。

荷信

全集大中正輔弘康和五年信後玉く〜〜〜二見  
の海の見よけ〜荷信信〜〜〜松のむ〜  
文集源仲正天長以木〜〜〜中風の荷信〜  
た〜〜〜庭よひ〜〜〜花のい〜〜  
歌人社会信工信光ぬ〜〜〜とぬ〜〜〜な〜  
あ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜  
且〜〜〜あ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜  
あ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜  
歌人空雁白合元板正信佳あ〜〜〜〜〜〜〜〜〜

たし宿の屏 芭蕉 ちてしち中尉佐の書人と恨  
むしん 和久 磨出しと足事ぬむらとち 佳平  
飛らとてしち折ししち平白ししち 一入 本  
わししち中ぬしちの紙帳と彼の言 貞治 龍田山檀  
中ぬしちしち副毛存 亨和  
按し中尉佐のすきいすきつしちの義しちて金銀  
箔とすきつけ重くとしちしちしちしち伊勢貞夫の  
記しち中尉佐のすきい飾ししちの詞しちて東艦小  
舟始しちしち義経紀と五月すきたる赤糸成の  
讀しちしち又曾我物語しち梨北しすきたる白霞編

の鞍なしちしち皆飾ししちしちしちしち一程ありしち  
似しちしち中尉佐の娘甚ちしち黒川氏の工藝志料しち詳  
ちしち中尉佐しち平中尉佐しち中尉佐磨き出しち中尉佐  
の教養しちしち拙著中尉佐工程しちしちしち平中尉佐はたし  
らしち中尉佐しちしち中尉佐しちしち名つけしちしちしち先しち中尉  
佐と坐の茶しちしち其の上しちて吾所紙教杖と  
しちしち下佐漆と海しちしち九四五回しちしち漆の  
加減しちしちしちしちしちしちしちしちしちしちしちしちしち  
しちしちしちしち其の上しちしちしちしちしちしちしちしちしちしち  
しちしちしちしち諸漆器と茶しちしちしち又しちしちしちしちしちしち山

水花鳥花紋等心のやうに魚くさうを又細密の圓  
重釘様の花紋わい又厚葉傾小下虫と重き楮は  
牙ふてうへに紙とらうも平滑やうにして下任漆と  
して其の紙は表面より下任のやうに筆毛と矢  
いふやうにふくことと漆器の表面小點付と  
之餘の筆篋として輕く小上とくもてあうして紙  
と刺きさうに任様花鳥として漆器小印跡と  
なすやうにたきて赤粉として其の面とらうに任様  
として鮮明なりやうに任漆として其の上と重き  
産室小入と乾くもやうに即ち一個のことゝ任漆

ハ乾きの度とて乾きて速乾なりとて其  
法ハ銅篋の上小任漆とたし産室とて焼く時  
膳とて水多とて去らうとて火と焼漆とらう又  
任漆小樟腦と入らうに漆とてくちかしてらう  
木とてさてめの漆器とらうにたし産室とて出  
たし厚朴炭とて輕く小虫の面と研きあうと  
なとて又産室小任漆とたし木が筆とて虫の  
面と重きなりやうに金粉と研き毛棒とてとまか  
けらうことと才二圓のあうに金粉ととまかけらう業  
ハ産室とてくちかして産室とてくちかして産



て定めた方法として鋪上の百数十年前の  
以て知られて漆上の工程は煩わしくして鋪上  
は簡易なもので知れて近來漆上をなすもの  
稀に漆上の先の平舟位の工程の如く下位漆と  
して直ふ花紋花島など更く、又下位と  
作しては、がひのようになしてきて既色漆は  
伊勢漆と和の面と塗る高く漆と盛るは其  
漆の乾くぬくより銀粉又錫粉と并き毛楯と  
してらまるとも漆の埋め蓋蓋小入と乾くして  
既色漆としてことと研き古跡漆として其漆は

なり蓋蓋小入と乾くして引き研き角粉小  
て光澤を生とて、工程は前より鋪上の前  
の工程の如く下位漆として更きとて既色漆は  
磁粉とすせ鋪漆と製し面をぬき高くして其  
け其の漆は乾くより、ろろ小錫粉と撒布し蓋蓋  
小入と乾く、石金磁とて研きあつとを、  
又口漆として、茶の如く塗る、蓋蓋小入と乾く  
、既色漆として研き去る、して位漆として面  
と塗る、金粉と并き毛楯として、刻り書と  
、引き磁石角粉と引い仕上となす工程は前より



口一の研き出し蒔絵ハ金銀粉とすきたる上小  
漆とぬりて研き出しそのせれハ名づけた  
りなりて蒔絵と曰ひて工程とすて蒔絵と曰ひ  
概を及諸色漆とすて其上と塗らるるありて字  
朴炭とすてこまを研き出し後小古研漆とす  
て漆とすて概色炭とすてこまを研き出し他の工程  
ハ蒔絵以上三種の蒔絵ハ工人常小行ふ所  
の工業なり世の地蒔絵の製造種々ありて略  
して又金貝責貝梨子地如金華の工業ハ蒔絵と  
異り且つて現在ハ昔蒔絵師の工業とす

本筆画

本筆画ハ本と焼き筆とて画きたりなるは云  
本筆一小竹筆<sup>研</sup>家画法或小竹筆ハ俗より焼  
筆なり和制とす本とすといふは槍の本れり  
概とす本を用わたりて何ぞ画者画と作ら  
んとす小南とすは竹筆とすて鉛筆位を結構  
のありてすつけし之佛画と画く者ハ本筆のこ  
ととて画くると墨小用なりは膠ハ動物とす得  
る所なりとすてこまを研き出し本朝画図目録  
ニ先般本筆の類仙水画 雑遊笈覽ハ本筆の画

ハ光祿の本筆の款仙あり又兼寺七祖の右字も  
本筆小て書きたりニ幅ありてこの大師  
唐山しそ持ある物なりと 輔蘇画讀小本筆  
款仙也の如くは後なり為す小を年擬と命と  
水草と重くと見しそ風致畫し蓋光祿小  
伯仲とすとの云々

東洋美術牙四号小筆山蘇の本筆重と類し藤陀  
の係と指して曰くこの係ハ海辺筆山蘇の本筆  
小て細し小描きたるものなりこの係ハ毛筆の  
外筆とて筆と他とてハ和漢其例ありて順

朝長ハ和石狀と記さし本筆ハ竹且の時  
竹打人の創意小出て一々確証ハ奈見きしれと  
も千年と前しそ説小この事あり語考しそ小梵  
字と他とてハ古く本筆とてちあわしといハ堅存小  
あつ小まらせて直ふこととて重と他とて  
る本筆重の創始なり一弘法大師の本筆とて  
梵字漢字併係と自在小他とて一其ハ本朝重史小  
も記しそ本筆重の現存とてとて又つ小こと  
ありて降きて根拠との同祖貴鏡上人の本筆とて  
梵字と他とて本筆の不動と他とての傳あり

そかの不動尊と日課小重とて其の名も妙海  
の筆蹟とて本筆とてうけとて又ゆゑその往  
とありけり他と僧賢正の派唐天神の依僧智  
海の不動二童子の依本筆画のせよありとも  
の妙なりと云く水戸の廻云くあるの本筆画小  
なりといふ筆蹟とてか人唐の依と云うれ  
て云く

林ニ春徳錦顯文状小克不極小貞和以姓藤原土  
佐氏挺立位下越前寺 地下傳 重史ニ克顯ハ土佐  
兼隆の子なりて吉光の家と傳ふ挺立位下越前

寺ニ任り又兼隆の教とまけ其の技大に進む建  
武康安年間巨師高僧と文つゝ故小克顯の画小  
名家の賢師とてその名

国府任

国府の製ハ麻にて古きころハ麻の條既ふい  
りあり

猿遊笑置小人倫訓蒙國章の奈良國府ハ春日の  
社人の中ふこまを作し京ハ油十路中立賣上り  
所ふあり南世大板長所にて作し所人賣子の持  
領とて判し物よりいさま〜は車とかく代  
物と鉄より〜涼風と求む減ふかゝ行の重宝か  
るもつ〜を任ハ所村の流りなふ〜至の國府  
ハ子くす〜又江戸にて國府の行ひ〜ハ

宝曆の記しをなす。志道形傳小夏は余を  
尋ひ出と判し國麻供ふらひ云く  
は世佐類考小文化之四年の比坂河所國麻同在  
故ありて其國の板板画と止り英山川の役者画  
と出。大小行の。こゝありて。歌川  
國政の其國の字才サモ中山宿と。似息と画  
く小其の人側ふあり。如く目前ふ。如く  
其の項車似類年月の國麻往流り。故小國麻  
同在。と板板下ふ。也ふり。と  
大小利益と得。と梅小國麻画と板板ふ上せ

一ハいつ頃なり。詳ならず。蓋し宝曆の  
和之後なり。浮世画師考。と画き業。とせ  
る。其の画も風俗美人画。の排優似息。等ふ  
り。き。通。是。四。條。森。の。画。師。四。季。の。景。物。り。と。画。き。て  
大小行。り。と。板。板。画。同。在。の。東。画。り。と。板。板。画。所  
小。教。新。あり。て。其。の。上。画。り。と。至。所。標。示。の。画。り  
所。り。と。と。國。麻。の。名。産。り。と。海  
外。小。輸。出。り。と。大。板。板。画。名。古。画。り。と  
製。之。画。様。の。大。板。板。画。り。と

麻法

麻遊笑覽ニ古言小 倭日本紀麻とありいと不固  
 麻サリウチ小木の麻出来てことと多つと礼と  
 一節のこくく用わると其の後小紙のあしき出  
 ありとてさて麻小更くくくハ源氏物語 朝日小あ  
 うき紙小竹小言紙如くくくちく切きたりくね  
 目骨小とてくく云くまの木の麻即ち檜麻杉目  
 の麻小松竹檜麻ふと更りて衣家の草子之腋の  
 くきふら此物とつこくま古一幸ハ本朝魚  
 丈小又くく後小古禪ありき鳥佐麻あり古祿

府ハ古禪ノ重シクありきまの鳥佐府ハ泉州堺  
ふて何れもこの法よりして修して一休和尚の書  
出るときはこれより古禪の重き世運の府のこと  
平春トウ石画苑小禪の女用際小  
小古禪より法法師ありけり一休と府小  
き出せしハ古禪の男女在法の眉舞り  
丹花の唇をわらわのき  
候千載集小人のありきの法小郭公きつたる  
こ法をよませ侍るる小 かくきけなる  
是きけハ山さきつねもこく小人もさる

新 法道 侯 夫本集小一宮師府の画小五葉の  
小 岩根ふたてくあり 吾代の岩根ふたて  
もくこなりつたつてくまの松をたひき  
輔 枝遠集小たあつて祭りけるはあつて小  
りせあまひき 七夕のくやまきよ天の  
川こまひきうまの松をたひき 天曆は製  
和泉式部集小あつて言つて人のくも府小  
萩な言たつてく小露もく凡ちあつて  
古垣那小たつて小萩の下まきく 千載集  
小三條女卿探子通世のくあつてく小片出

此世所、極前、

してつゝ、い、侍、して、て、侍、

新、と、い、く、と、い、せ、と、い、お、と、い、ひ、と、い、お、と、い、ぬ、の

枝中納言

昆陽漫録、西土、ハ、神國、の、如、く、麻、を、く、明、も、ま  
て、我、の、國、の、麻、を、ち、て、つ、く、く、と、東、西、洋、を、く、西  
山、墨、法、を、引、て、裁、と、其、の、文、た、り、く、く、一、兩、山、墨、後  
日、宋、前、推、用、團、扇、元、初、東、南、使、者、持、張、頭、麻、人、と、皆  
持、裝、之、我、國、永、樂、初、始、有、持、者、及、後、充、貢、遍、賜、群、臣  
內、府、又、做、其、制、天、下、遂、通、用、之、又、蓬、志、談、錄、曰、余、至  
京、有、外、國、道、人、利、馬、寶、贈、予、倭、扇、四、柄、合、之、不、能、一

指、甚、輕、而、有、風、對、此、倭、扇、ハ、今、の、麻、を、く、皆、也、て、く  
ま、く、把、紙、ハ、西、土、の、把、紙、ハ、は、く、く、堅、緻、と、い、く、と  
今、の、把、紙、と、い、く、く、

皇朝類苑云、日本麻、遮、帘、末、余、見、日本麻、漆、柄、以、  
鷄、青、紙、如、餅、標、為、旋、風、扇、淡、粉、重、平、遠、山、水、薄、傳、以、  
五、彩、近、岸、為、寒、華、衰、夢、鷗、鷺、行、立、景、物、如、八、九、月  
間、展、小、舟、漁、人、披、蓑、釣、其、上、天、末、有、微、雲、飛、鳥、之、狀、  
意、思、深、遠、筆、勢、精、妙、中、國、差、圖、者、或、不、能、也、素、價、絕、  
高、全、時、畫、賣、無、以、買、之、每、以、為、恨、再、訪、都、市、不、復、有、  
也







まのあひけのニヤ平小忌と付るなり凡工記  
小忌と云ふは信るうと其の神と重くへきり信小  
ハ神子の形と云ふも一て鳥類人形其の和らぬ  
〜其の形と重くハあやう王なり右平記ニ十  
九將軍居の傳ふと其の比其佛靈社の由は  
向麻志麻のむら〜信も河保松山、河原軍と  
てうらきぬ人なり〜云々〜と又其ハ右平記  
の頃と信るの代々小人形女と云きて寺社小  
細り〜ころあそ〜なり 南嶺送行桂光樹著  
空曆板  
信る小武者信とかくこと古一園記と云ふ書小

建曆年中伊豆の三島の社ハ八幡右部の陸奥の  
軍の國と信る〜その所々も右平記ハ河保と  
秋山との國あり其のころ其佛靈社ハ向〜  
〜掛けたるなりと 閑意隨筆 鈴木忠侯著 小信  
古ハ神社ハ馬と秘す〜こ〜ハ神馬と〜ハ神子  
と秘す〜こと力のあよハ〜人ハあ〜馬と  
つら〜秘す〜なりぬ人の重くわきてた  
てまつる故ハ信馬〜ハ後世ハ馬ハ〜種  
〜其の〜と云きて尋る〜ハなりぬ 中興撰  
津國生玉の社ハ信馬ハ八島大臣 宗盛と伊勢ニ

郎の馬もふけて海をひきあくる國あり大  
臣たる人の悪名を信馬に悪きてかくること  
許物とす 中畧射術砲術家の的と顔す奉納  
まゝハ其の名とせよ流布とせんが存りふ  
る

扁額軌範の序不吉寺小概す信馬とつとの  
ハきく神ふりま御たてまつるしと結す神  
馬と奉じたてまつることハ國史ハ又つ上つ  
世のつふつとて人々の如つとひきで  
はしつふハ加なれ馬といきたすハ  
そのふりハ奉は恭送ありとす  
信ふハ更きても奉りたること  
文獻文粹卷十  
信在馬と是意

弘九年六月二十五日之とあるハその二前  
そありし一ありし又佛のハ前小奉るハいとち  
りむこと、武者の形も何れとすたの  
ありききて奉るそのハ天文永祿の頃なり  
一 年々ら又かふふ所なきハ此所のやら清水  
寺なりふりけたる狩師長谷川油北別ふ  
くは妙馬とかかしの世々の博士の力とそ  
りきたるはてなきうねりて馬と二百とせ  
のよと過きとも日きめなりなりなれど  
いとわしきふらわおしひてはの以北川者成ぬ  
一 其の古くはてなきうねりをつゆたうし

しきり速水のうへ侍ふ其好とつとに  
るされて其まじなまきとのかきられたり  
知れぬまきつ國人のためと法の重博士の考  
ふもこまなき幸ふちんあそびたのしきやく  
とてけこまおとい出たりこまあうせ  
ひふつとまなめて月日任ふとわくま  
くのいたるうとこまあうせとて人の  
けりまきししいと空考のまき書ある  
郡志わりのまの浦く湯浅任邦  
梅小佐了と神佛ふ奉納まきこま  
あうせ

まありて其佐了の作ふ民者任たり奉納まき  
種念母作とて娘まき〜廟額祀苑の序ま  
天文承祿の頃まき〜とつと園記小建曆年  
中云く右年紀に所保秋山まきとありい種念時  
代既小ことありて南北朝の頃と武志任と奉納  
し候ふい種まきのまきと重して奉納まきとあり  
るなり農高の家毎月農神ふまき、額面い新の東  
りて佐了まきのまきとことと指して重馬と云  
又其若重其の他種まきの重の額とまきととこ  
て佐了とありて重馬ハ即神仏まきと額面の古

き石標なりを以て標と云ふを新しう去稀し  
却て里馬と云ふ一類車と稱しうふを類車と  
重く小法ありて重き小舟を任馬と稱しあきりふ  
く一と云ふ小舟のきひりけたるうう一人形と描く  
小舟のハ具とぬり其の徑合黄子とてくま  
と朱筆にてくくくくくくくくくくくくくくくく  
法臺なりこれ一と云ふくくくくくくくくくくく  
燕脂にてぬり或ハ赤くくくくくくくくくくく  
りて赤くくくくくくくくくくくくくくくくく  
き後小舟と云ふは里馬ハあいらくくくくくくく

の如くくくくくくくくくくくくくくくくく  
佐島の妻と記し言ハ扁額軌範巖島石所因守  
長者抄正使末於社寺類向畧記善なり

掛物法

文晁画談小立軸一ツハ横卷小對一ツハ一  
く一ツハ吾邦の掛物一ツハ高江村清長録一ツハ末蓋文  
黄溪山行旅圖立軸高一尺五寸闊二尺一寸一ツハ  
一一ツハ此邦の横物一ツハ立軸一ツハ又洞天  
清録集一ツハ古画多直有長八尺者横掛一ツハ於末氏又  
子非古也一ツハ又清長録一ツハ吳仲圭松泉圖立軸掛  
作横卷一ツハ孫退谷跋一ツハ云吳仲圭古松泉  
石古幅長條一ツハ做置和装法改而為卷一ツハ一一ツハ横卷  
横掛一ツハ一物一ツハ立物一ツハと一ツハ横一ツハ卷物一ツハ一一ツハ不

子海一考物ハ昌黎、重化石玉、個川、  
之前、  
身又子、  
た

奥向、  
女、  
水、  
き

鳥、  
神、  
方、  
山、  
櫻、  
次、  
在、  
坐、  
く



むらむらしてきて竿の苦ふらけ竿分てうもひひも  
右小竿と持て左も小掛物の下と持て床の面小  
行きぬくくくく全儀と又もくも下もて竿と太の  
方小おきもつとき能く曲ると又て退くくく左  
の方女くくくく心持小くくく目立能くく  
たぐくくく君床深くくく床つらの外もて掛  
籠り時ハ初は能く考へ懐中くくく墨紙と出く床  
のふも表て其よへくくくく掛物の表具  
小真行ゆりて号者の竿式く主人表組の重畳録  
ハ必真の表具ハ仕立くくく其儀ハ行くて道有と

ソハハ次と輪布とソハハこま草小あくくく伊勢  
表在飾の言小其の表飾ハ三幅對行の表飾ハ三  
幅對二幅對又大座一幅横物小床の飾ハ聖物一  
幅柳の飾ハ小幅の二幅對とあり  
梅小掛物の重ハ山水人物花井鳥款等種くあり  
今ハ法式ありくくく自然高尚優美なり國様  
と標ハ各其家々く古南のものとエ支くくく  
其表具ハ種くあり今其中の一二と掲く

水手伝

古画備考水手ハ躬恒集小〜〜〜又〜〜  
こ〜〜あ〜〜と〜〜義〜〜水のなるとた〜  
中〜〜け〜〜あ〜〜 躬恒集延永十三年十月  
九日おわせよ〜〜てた〜〜女一宮は日裏  
着よたてま〜〜せ給〜〜ゆま〜〜の〜  
ふ〜〜つてふてま〜〜の〜 なるれいつ〜  
山とお〜〜いよ〜〜の川ぬり〜〜ら〜〜たえむ  
〜の〜い 古今要覧よ東と係流た〜〜と合よ  
云と〜よの〜〜ら〜〜つて〜〜の〜 幸

まも花もときりふ咲ぬまのあまきりつらに休  
くこえりき うねまき ちりも白くまき  
か林なまきり程こちらの花のつひつ 七夕  
ひらやー雲のうらふあま又つそーた。わさふ  
とあまきりまのまきまき水ててーのま  
あまけん心をつらまたまきりまのまきりまき  
まきこちらの花

本位

本位ハ嵌木ヤ一て即ち本片を諸器物ハ嵌入を  
してて花鳥まきの形ちゆつてて出さるる花  
ふ前田氏の説ハ嵌木の技術ハ古来我々國ハつ  
たり且り其の創ハ唐工とてまけ侍へたまの  
まきりまのわらまきりまの確手とて明証あり古  
製品の今ハ存せりまの古書中ハ記さるるま  
法とてまきり考つるま古ハ本位と稱してた  
るハ魏晉の裝飾ハ此の法を用わるといふま  
東大寺ハ何れも魏晉ハ花鳥まきりハ遠山と鑄と

ふあまきと琵琶の銘と集録もこの本伝と  
つらつ何れ即ち本伝ある名苦かき一石  
を他ふとくはきして直ふ本伝と唱ひしき  
一於琴教録の上巻に琵琶室物語二十一云く  
あふくま牧馬のこまと装飾のやうに固めて  
考ふれば紫祖甲ふ馬と二と正本伝ふ馬と  
入したるやうと何れあはれしむる最本の杖と  
一千年前より我々邦に傳りしきそのあて古く  
の本象眼まき最本なりと言ひし本伝といひし  
ま云く駿河地方よりつらつと寄本細工より

そのまき 其の根元の本伝を重化し是也  
なり

胡粉佐

胡粉佐の書名。聖武天皇の時既に其の所を現  
し奈良の諸寺に存する其の所は古器物中少く  
く胡粉とて記されたるものあり後世亦少く  
と記されたり其の所は重宝なり其の所は  
安政の頃芝神の所にて胡粉と記されたる  
其の所は奈良山にありて重宝なり西海に  
るると司馬印漢の造法なり

漆画

工藝志料に漆画ハ漆とて以てり。諸器おし  
他色の漆とてり。各種の画を描きしものくは  
て其様評せり。延喜五年醍醐天皇制して朝  
廷に於て高倉と修き。時の器具と定めて漆画  
の花盤十六枚とせり。漆画の書冊よるもの  
ハこれとてり。延喜年間ハ漆画の蔵クラシム器  
ハ漆画と作ししものと好む。これと漆画の唐櫃カラシム匣  
ハこれ。高倉天皇の御宇。陸奥の南都の工人漆  
器と製し。これと南都ミナト器とてり。や漆の







焼遊其堂不深平 盛衰約小三浦義盛の去小三浦  
小右郎義盛焼魚一たる事とありハ焼印不  
了文字とも焼魚一ツツハ魚のやうなれハ小  
也云々

古魚伝考に長門本平赤相法小元暦元年二月廿  
日義任院考之條中一人ハ赤魚本任人後又本葉  
畠山在司次郎重志 中畠 大中黒の征夫の實也也  
き重と一と一とわびくを云々

編魚伝談に弘賢按、焼魚古人の作ハ唐紙うま  
其の画力とらかきふ決して饅ふあはくは近疾

後急軽重浮沈意の如くハ一々最暢潤を考て  
けの論と長尾祐壽小傳に祐壽元來魚圖と云々  
と退て決一作を望り譽へまは杜鵑の圖ハ一  
世間此他よりまきとを疑て古人の此ハ饅ふあふ  
まきとを却り又按小饅魚と云ハ語となすれ平  
かて重きして筆画と言ひされハなり。漢小大魚と  
ハ小魚を云々 焼魚詞ハ 享和二年五月本 焼  
魚を再録と一 焼魚と云ハものハ雅なりとの  
み一ありハ一つの以てハ一と云々ハそのや  
えハ一と云々ハ一と云々ハ一と云々ハ一と云々



享和二のころ五月かゝりし本元才在

香亭雅談に大筆画之事詳干搗換校今物伝屋代  
輪池焼画考云然者未見其書聞文化中島羽侯工  
大筆傳之指劍如筆歲辛未朝鮮聘使來對州如翠  
与接伴之負以其技示使人大學生李文哲甚奇之  
作詩稱讚焉前今二十餘年温岸卿有善大筆者年  
六十左右於紙上及板面寫花卉禽魚等物于一再  
觀之今按其辰為吾對門隔水之處蘇仙去已久御  
隣無知其名者惜哉

按：燒画の技ハ今物法より見ゆ古くより有

たゞりて享和年間より本元才在俗評評々茶

徳小才在ハ凡流のくくく焼画と再具一遊亭と

用く古画備考小琴信集より書より引きて文

化四年焼画記ありけし名師より世に出たたま

へり云く焼画とまことりしを本若橋和橋とい

えり人の技と付くく画とけりが行ひは

焼画の巧なりハ山水人物花鳥等濃淡自在なり

て恰筆として画くがごとく口伝曰く焼画と

筆尖の画と異なりたる一の筆尖を故に画と

名くしりくまると容易小けの術と云ふこと能

いさゝかある鏡の運用甚難しとを朱大少詹と  
とゞもりの法按きの茶筒おまの桐の小まに菓  
子茶をいさゝかの焼菓をいさゝか口内ハ知村と  
けの箱及び茶筒をいさゝか焼菓とて生汁の一助と  
せし由自注とす

佐櫃

旅遊笑覧雜考の條ハ又佐櫃あり俳諧五節句類  
二行辰上月柳の佐櫃ハ柳本地の櫃ハ桃柳と云く  
櫃の内ハ草の解未解とありは臺起りといふ  
法是より重なりわづか是五音なり本地の挽物  
ハ重なり土佐日記ハ二月十六日よりさるつ  
く部ハの初よりついでハこまハ山崎の小櫃の佐  
ともうそのついでハりさるるを賣人のむと  
と云ふなりといふなり土佐日記の文ハ貫之ぬ  
任國より知女と云ふなり歌きの念茶文ハ佐

くまのいりつと知きまのいりせり  
あひ出しし我むい若人のあふしつあふ  
こし小里の教つそのあふし又九月九  
日孫菊の佐権いつの飛之月節白ふ日佐小菊  
とめくちも内小菊も赤飯も入て口臺匙おつが  
あふ又自序の中小袴もぬ浦の雲い桃柳の佐権  
と見るとあふし田舎ふの行とつとふ其  
國とふふ小櫃の飛田吉く舟僧飯いつ形して蓋  
ハ橋長の長とさり角をうをき曲物のうふとね  
たわし小佐と橋と菊とうきたるハ後の製して

春秋二書と兼つて佐せを浦人のいりし  
とねふのいりつかりて田舎ふのこしるあふり  
ふ中諸國舟遊誘ふ佐権のこしとつひて今と法  
北の村里ふハ二月節白ふハ必用ふふ知きは  
よてハねふとつねハ二月の末ふのあふり  
とさしふ今ハ佐てこあふつハ今國も、幸國も  
た活北の今と姿ともあふりしてうづと蓋の丸  
き櫃小菊桜のあきたる國と出つてふハ舟ふ寛  
政の末の櫃もて知きはとつひハ宝曆はふも  
中あふハ大いふ其はいふつさし腰出ふと櫃



繪日記

繪画沿革考 黒川小天曆の頃より日記の類を  
かへたを其徴に源氏物語絵合巻小源氏巻の絵  
と尋ふ條に「かのうぶの日記の巻ともそいつ  
させ侍てこのついでに女君もそさせたりま  
つて絵はくも云々さうし浦々のあまうぬさ  
やうふいそととえそいつ侍ふ云々ところ  
のあまうぬおわつうき浦々破のわくじやく  
かきあかりりあつそ巻のよふかふのよこら  
〜わきよきておわのく〜日記のよこら

あはれなる 歌なりとも たりとも たりとも あり  
たゞしき ことごとく おわらば 是きなり 是は 佐の 眞  
こまかき 分りつる ありとも ありとも ありとも ありとも  
と又 又 杖衣 杖衣 杖衣 杖衣 杖衣 杖衣 杖衣 杖衣  
君の 送物 又 佐の 書 佐の 書 佐の 書 佐の 書 佐の 書  
あつた 佐の 書 佐の 書 佐の 書 佐の 書 佐の 書 佐の 書  
の こと こと こと こと こと こと こと こと こと こと  
たれと いろいろ いろいろ いろいろ いろいろ いろいろ いろいろ  
よも 我も 我も 我も 我も 我も 我も 我も 我も 我も 我も  
日記 日記 日記 日記 日記 日記 日記 日記 日記 日記

一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
佐の 佐の 佐の 佐の 佐の 佐の 佐の 佐の 佐の 佐の  
按ふ 古来 佐日記と 書きたる 者 蓋し 多う 一 一 一  
まう 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
或は 重き して 和歌 なり 活 いたる 書 道 世の 重工  
河 鍋 眺 方 の 重 日 記 の こと こと こと こと こと こと こと  
加へて 重の こと こと こと こと こと こと こと こと こと こと  
この 佐日記 四 五 冊 と 存 する 全書 こと こと こと こと こと  
小 唯 重き たる の こと こと こと こと こと こと こと こと こと こと  
人 こと の 如き 其 容 色 と 本 板 小 刻 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一



ふぢも其の中一洋装をかいて椅子ふふして  
人ありこと即美人昆徳扇ありて小田系提灯と  
手ふさげたる人ありこと即辻果なりて此類なり  
又旅行重日記教養ありて曉方常座ありて小語ありて  
曰く重とてて旅行日記を伴ふハ志願して一過り  
其の山川草木と字して送漏ありてハ真水こと  
良くと稱して一と

